

臨床青年心理学研究(IV)

—女子症例に関する諸報告—

池田博和 伊藤義美¹⁾ 江口昇勇²⁾

I はじめに

本論の目的は、われわれがさきに報告した「臨床青年心理学序説」(田畠治ほか, 1977)においてなされた多分に理論的な方向づけに対応して、これを具体的実践例に即して肉づけすることにある。とくに本報告においては女子青年の場合に焦点をあてることにしたい。ここにあげる3つの症例は、それぞれの筆者が自らの臨床場面で経験した事例であり、おのれのは独立したものであるので、それぞれに考察を付すという形式をとったが、その中からも女子青年にかなり特異的なあり方が共通したものとして取りだされうるならば、これを最後にまとめる試みを行いたいと思う。

II 一過性の疾風怒濤をのりこえた女子青年 —再生と秘密—

1. 症例の概要

症例1 S・Y 女子 来談時年齢17歳4ヶ月(高2)

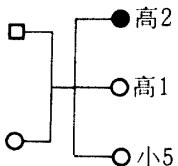
1) 主訴 家出して、現在無期停学中である。お経やテレパシーが聞こえる。

2) 問題の発生と経過(両親とのインターク面接から)

高校2年の夏休み、クラブで写生旅行(7/22~7/24)に行った時に仲間と飲酒や喫煙をし、また単独行動をする。8/11: 長くなった髪を切るように厳しく叱られるが、激しく抵抗する。8/15: 母親が強引に髪を切る、意外に素直に切らせる。8/16: 家出を決行する。写生旅行先で知り合った男性(23歳)の元に飛び込む。家には帰らない、連絡しなくてもよいと言い張ったが、2晩泊って送り返されてくる。高校側から無期停学処分を受け、宅訪指導がなされると同時に教育センター教育相談室へ差し

向けられた。

3) 家族構成 5人家族 父親(42歳): 自営業 小



憎あがりで苦労してきた。うるさいことを言うが、情にもろい。乳児期に不注意からYの顔に火傷させた自責の念が消えない。(今でもうっすらと火傷の跡があるが、あまり目立たない。) Yは尊敬していると話している。母親(41歳): やや表情が暗い。Yに言わせると「誰も信用してなくて自分ひとりを信用している。自分を絶対表に出さず、りこうぶつっている。すごく淋しくてわがままな感じ」である。Yを「どちらに転ぶか、あぶなっかしい子」と見ていて、Yとは対立的で距離がある。エレクトラ・コンプレックス的状況である。本人: 神経が細かく几帳面。自尊心が高く傷つきやすい。中学1年生までは期待される優等生であったが、中学2年生から様子がおかしくなった。妹(16歳と11歳): 高校1年生と小学5年生。二人とも明かるくのんびり育っている。Yに言わせると「母親に似てがさつで無精、私の監視役」である。

4) 本人の生活歴(両親と本人のインターク面接から)

出産時: 仮死出産。生後8ヶ月: 父親の不注意でタキ火中に歩行器がひっくり返り、その時の火傷の跡が顔にかすかに残った。5歳: 交通事故で頭部を打ち、1週間意識不明だった。EEG(一)両親はこの事故の後遺症を心配している。N市からT市へ転居する。姉としての役割をかなり厳しくしつけられた。愛想が良く気を遣う子で、友達の中でも自分が中心になることを好む。小学校: 他児に対してもお姉ちゃん的でいた。面倒見はいいが、自分が中心でないとタリ。身体が丈夫でなく疲れやすかった。小5: Yが学級委員になる、ならぬでクラスに摩擦がある。「女は可愛く生まれないと損だネ」とか「顔が悪くても勉強しないと…」とか「男に生まれたかった」ともらしていた。学業成績は良好で、家族や周囲の期待の子であった。中学校: 中1では副級長

1) 名古屋大学教養部

2) 松蔭病院

を務め、部や班で活躍した。中2になって急に不眠がちになり、勉強ができなくなる。脅えがちで、ひとりでいると声が聞えてきたり背後に人が立っていると感じた。机に鏡を置き、背後が見えるようにしていた。うなされて眼をさましたり、一緒に寝ていた祖母にしがみつくこともあった。昼間はカフェリスト錠を飲んで眠気ぎましや疲労感の回復に努めていた。宗教に関心を持つ。疲れると寝ている時にお経が聞えてきて身体が硬直する経験が現在でも続く。中2の時、クラスのワルに性体験を強要されていたことが、家出後、親が男性関係を問いつめた際に初めてわかった。成績は下降していった。中3になっても考え込むことが多く、勉強は全然手がつかなかった。「本当の友達とは?」とか「生と死」を考えた。『家出のすすめ』や『自殺のすすめ』などを読み、死のうと思ったこともある。高校:A高(県立)しか入れず、周囲の期待を裏切った。入学時は友達も珍しくなんとか元気も良かったが「自分にはやるものがない」と考え込むようになった。夜中に亡靈を見て脅えたり、授業中にテレパシーが送られて頭が痛くなる体験をする。宿題も勉強もせず、外出も全くしなくなる。高校へは喜んで出かけた。高2の夏休みに逸脱行動と家出したことにより学校から無期停学処分を受ける。

5) 来談時における総合所見

お経が聞こえたり、テレパシーが送られてくるという異常体験をしているが、人格の崩壊までには到っていない。二つの大きな外傷体験(顔の火傷の跡と性的強要体験)が、青年期危機を増幅した形で顕在化させてきたと思われる。自発来談ではなく本人の来談意欲はかならずしも強くないが、動搖して不安な本人もしくは家族への心的援助が必要である。

2. Yとのカウンセリングの過程

インターク面接は、S室長と並行して行なったが、それ以後は筆者が本人と親との面接を担当した。

交通の便が良くないため父親がYを自家用車で連れてきた。また無期停学処分が解けてからは、学校を早退して来談することになった。

以下、インターク面接とYとのカウンセリング過程について述べる。

インターク面接(8/25) YとはS室長が、両親とは筆者が面接した。Yはセーラー服姿で現われ、淡々とした口調で話したという。両親には問題の発生・経過と生活歴を中心に感情とともに事情を聴く。父親は沈痛な面持ちでせき込むように話す。母親は時々涙を流しながら

娘については父親よりも自分がよく知っているといわんばかりに確信的に話す。面接の終了直前にさんざんためらった挙句、「誰にも話さないと約束したので、絶対秘密にして欲しい」と前置きして中2の性的外傷体験のことを父親は眼をうるませながら話してくれた。なお、家出の原因として父親は、①顔の火傷、②不眠のため勉強ができず、成績が下がってきた、③異性との交際の自由、④髪の毛の問題で親と衝突した、という4点を挙げた。

インターク面接以外に筆者は、Yと4回の面接を、親とも4回の面接を行なったが、主にYとの面接過程について記述する。

1回目(9/8) ①皆んなが「今日はどうだ」と聞くのがうっとうしい。ちゃんとしっかりしている。お経は聞こえなくなった。今日で無期停学処分が解かれる。②人の眼つきが怖くて人間恐怖症みたい。人に断われない。近づきたいが近づけない。本当に心が許せる人なら飛びこんでいい。親では嫌!③皆なんと自分が違うみたい。いつも私のなかにもう一人の私がいる。私を軽蔑し、嘲笑う私。本当の自分を見もらいたい!④今、つきあってる公務員の人(24歳)は、私の悪い面でも逃げずに認めてくれる。チンピラに肉体的に追いかけられたことがある。侮辱!頭に来た!プライドが高いから。精神面をみて欲しい。肉体関係を持つとブレーキがかからず堕落する。⑤誠実に生きたい。男みたいに仕事に生きる。女に生まれて楽しくない。損なことばかり。社会の常識が同じ型にはめる。⑥今でも家出したい。のんべんだらりと親に甘えている自分に腹が立つ。家を出て苦労したかった。工場でまっ黒になって充実したかった。出て、体験してみなくちゃわからないと思ってた。⑦親は表面的なことだけにうるさい。気持を言わず遠慮してる。それが負担。私も感情を抑え、気持を出さなくなった。親が思ってる私は、優等生、頭が良い模範生。崩れた醜い私を知らない。話せばきっと眼を丸くする。⑧とにかく自分に忠実に行きたい。自分で乗り越えないといけない。自分を信じてる。自分で生きることに関して。今まで「あの人のためなら」といつも悪役を買ってた。他人を信じて自分を捨てちゃってた。⑨1日に2・3時間勉強して。各種学校へ行き、何か資格をとるつもり。壺つくりなんかやりたい。

《印象》セーラー服にズック靴。対人的緊張や脅えが強く、視線を避けてうつ向いたり眼を伏せて、またはせいいっぱいの笑顔を見せる(母親が言うところの「不自然な笑い・営業笑い」である)。女子生徒がよくみせる

ように語尾を上げ、りゅうちょうに話すが、内面の開示に抵抗がないというよりも間がとりにくい感じ。自分では大丈夫というが、知性化が感じられてあぶなっかしい。自我の統合ができていない感じ。来談には両極的な葛藤を見せたが、再度の促しに「来る」と答えた。

2回目（9/22）①文化際の準備で忙しい。50号のキャンバスに「幼児」を描く。人間としてきれい。なんにも知らないくてあどけなくて可愛い。そういう過去に戻りたいから。②今までの自分を打ち切りたい。「冷たくなった」と友達から言われた。嫌なことは嫌と割り切る。人に頼りたくない。自分の力で…。今まで自分を出さなかった。自分がしっかりしないと…。みんなにいいようにしてあげたいが、そうすると八方美人で、なんか自分がないみたい。何がやりたいかわからないけど一応形式的にやらなくちゃならないことがいっぱい。③公務員の人と話したい。行きたいが、先方も迷惑だし親が心配する。その人には常識はずれでも思ったことがパッパッと言えて後悔しない。本当のことが話せる人。家では頭から押さえられる。他の人としゃべる時は、なんかプライドが許さない。④友達は、悪い友達か良い友達の極端に分かれている。両方を見てみてどれが正しいかわかる。まん中にいる友達がない。まん中の人は、人間つきあいが一番難しい。⑤悪い友達は救ってあげたい。話してみると心のきれいな人がいっぱい。淋しい人が多い。自分のことをすごく想ってくれる人がいないからじゃないか。放っておけないし、巻きこまれたくもないし…。⑥親は私のことを思ってくれるけど、くい違っている。本当のことは言わない。表はカッコいいが、本心は違う。物質的にはやってくれるが、心理的には何もやってくれない感じ。家で監禁されているみたい。息抜きに出るとクドクド聞くし、要するに私を信用していない。クラブだけが落ち着ける。⑦校長や教師への痛烈な批判。S先生（室長）と校長がつながっていて、ここで話すことが学校へ筒抜けみたいで…。《Yの話しの秘密は厳守することを再度話す。》

《印象》視線を避けなくなり、落着が出る。ニコニコとした愛想の良さにも自然さが見うけられ、時々みせる笑い声も可愛く響くようになる。黙り込む時が出てきて、考えたり話題を探している様子。自己探究が始まりそうだが、なにかふんぎりがつかない。引き裂かれた多様な双極性をひとつのものに統合していくことがYの課題であろう。

《この後、3回目までの間に教育センター嘱託のW医師と会っており、「しっかりしており、特に心配ない。また会いたい」と言わされたとYは話している。》

3回目（10/13）①すこしやる気が出てきた。ヘルマン・ヘッセにまた凝りだした。「車輪の下」をはじめとして。太宰治も。②みんながすごく悪いこと（壳春や桃色遊戯など）やってる。自分のことがせいいっぱいでかまってやれない。逃げ腰。今までの友達は、本当の友達とは違うような気がする。③毎日の生活が充実していて楽しい…。スポーツでもやりたい。何かやってないと変な方に走りそうな気がする。感情が激しく、感情のままに走ってしまう。途中で投げ捨てないようにやる気になっていらっしゃうけんめいだが、いつかぶっ倒れそう。気ばかり焦って無理してくる感じ。④ホッとできるのは、夜中にベッドにもぐりこんで本を読む時や学校の帰りぐらい。家でもしゃべるのが嫌だし、ひとりでないと身体がもたない。もう少しあったら自分がダメになる、変になる予感がする。精神的におかしくなるのが怖いのか…。とにかく今はひとりにして欲しい。⑤熱中すると食べることも忘れちゃう。いっぺんにやってしまわないと気がすまない。自分に強制しちゃう。コントロールできないと頭に来る。何もせずボケッとしている時は、何も聞えなくてパーンと浮いた感じ。⑥家出をまたやってみたいが、いざ行動できない。あの時の自分が羨ましい。本当に自分のことしか考えなかった。なんか齡とっちゃった感じ…。あの時は若かったなあ！今は後のことを考えちゃう。でも自分がやりたいことは押し通す。迷惑にならない程度にね。⑦将来のこと。長女であること。結婚について。⑧自分が一番わからない…。何を思っているのか。いまのところしっかりしているように見えるけど、コロッ、ガラッと変わるところがある。⑨《時間の延長を申し出て》会うのはもう終わりにして欲しい。もう一面、終わりにして欲しくない。言えない秘密がある。それを言わずに話しているのは許せない。私は変ってない、病気じゃない。思っていることがうまく言えない。心と顔が、いまの反対。（治療者を）遠くに感じる。私と違うのはいいが遠くに感じる。やっぱり先生は先生。私の眼中に入ってない。《かなり強烈に抗議された治療者》

《印象》最初会った時点から嫌な予感を抱かせた。伸びた髪で顔を少しでも多くおおうようにしている。話題が飛んだり、くり返し同じ話題が出てくる。スムーズに話せず、しばしば沈黙。これまできちんと座っていたが、初めて脚を交差させる。秘密に触れざるを得ないところへ追いかれたY。旋回していたが、結局着陸できなかった治療者との関係性とYの決断。

《もう一度、期間を置いて会い、その時にYがひとりでうまくやっているのなら終結することを話しあ

った。）

4回目（11/17）①11月から手編みを習い出した。友達の誘惑も断わっている。でも自分ができることはやってあげてる。友達から「真面目になった」と言われた。②今が一番幸せみたい。やりたいことをやらせてもらっていて、のんべんだらりと一応やりたいことをやってる。③自分でわかったつもりでいてもわかつてない、理屈ではわかつてもわからない。気持がわからない。自分の気持をつかまえているようでいてつかまえてなくて…つかまえていないつもりでいても、本当はわかるっていうか…ウム、よくわからない。④常識と非常識、現実と夢・理想の両方を持ってみたい。現実は現実でいい。夢や理想を持ってもいいが、計画的に実行していくことが必要。無理せず、スッキリしてる。⑤何も他人に強制されず、自由。自分で自分に強制する方が自由。他人がどのように見ているか気にならなくなつた。私が、他人を気にならないように。すごく楽になった。表面的にも深いところでもうまくやっていけると思う。とにかくやるべきことやっていけばなんとかなるしネ〔かなり確信をこめて〕。

『印象』元気になり、気楽な感じで話す。余裕と自信がでできている。脅えや混乱もなくなり、統合化が進んで“自分自身”になれてきている。異性や進路の問題がこの先横たわっているが、自分の意志と責任でなんとか乗り切っていけそうな感じを受ける。会う時間を学校終了後にしたため交通渋滞にあって十分な面接時間がとれなかつたのが残念である。

3. フォロー・アップ

電話と手紙によるフォロー・アップがなされた。Yからは2通の手紙が届いた。その一通には、「…時には理性を失って人をみる目がなくてうらぎられてしまうこともあるけど、でも私は、常に私を理解してくれる人を求めて今を大切に歩きつづけているのです」（4/10消印）と書いてあった。それから約一年後のフォロー・アップ時には、「地元の短大に入って、毎日元気にやっている、今は自動車学校に通っている、あんなことがあったなんて今では本当にウソみたいです」と、明るい母親の声が返ってきた。我ながら追いすぎかなと感じていた治療者もこれで安心できたのである。

4. 考 察

本例は、2つの心的外傷体験（火傷の跡と性的強要体験）によって青年期危機を増幅した形で顕在化させたが、自らの「実現傾向（健康性）」と「良き相談相手」を得る

ことによって疾風怒濤（sturm und drang）を乗り切った事例である。以下、二点について考察する。

1. 「虚偽的自己」から「真実の自己」へ

長女として姉として有能な優等生・模範生として親や周囲の期待のなかで生きてきたYは、「ませて、子供らしさがなく」、いつしか「自分自身を出す」ことよりも期待や役割いわば虚偽的自己を生きることになった。

虚偽的自己が優位になるにつれて真実の自己は、後方に小さく追いやられてしまった。こうした「真実の自己」と「虚偽の自己」との裂け目の矛盾は、親からの「分離－独立の過程」を歩み始める前青年期・青年前期において決定的なものとなってきたのである。

一段上からの配慮や面倒見の良さは、そこに潜む自己中心性ゆえに同性・同年齢者との親密な交友関係chumshipをつくり、協同的活動をするうえで妨げとなった。現に後に級友達から「いい子ぶっている」とか「言行不一致」という批判を受けることになる。級友との対人的摩擦が表面化したのは、小学5年生の学級委員の選出の時である。その対人的摩擦をYは、容貌や女性としての可愛しさの問題としてとらえていたが、実際には虚偽的自己を生きてきた矛盾が現われだしたと言える。身体の急激な諸変化や性的成熟は、女性的魅力のなさを嘆き、「男に生まれたかった」と嘆くYに、女性であることや性的な存在である自己にいやおうなく直面させた。更にこの時期には幼児期にできた顔の火傷の跡も心的外傷となって重要な意味をもち出したと思われる。だが、Yの存立基盤さえも揺るがし、神経症症状や精神病症状様の状態を呈する契機になったのは、なんといっても中学2年時の性的な外傷体験である。この突然身にふりかかった重い秘密体験は、当然親にも教師にも友達にも誰にも打ち明けることができず、苦悩は深刻化した。Yはまさに未知の疾風怒濤の嵐のなかに無残にもただひとり投げ出されることになったのである。その嵐のなかに身を置いて虚栄心一劣等感、盲信一反抗、熱中一空白・無気力、脅え一大胆、誘惑一禁欲、孤独一乱騒、誠実一堕落、横柄一羞恥、内密一仮面、自己中心一自己犠牲、自己愛一自己嫌惡、常識一型破り、現実一夢・理想、精神性一身体性、など多次元、多領域に渡って対極に引き裂かれ、対立項の間を搖れ動き混乱した。ヘルマン・ヘッセの主題やYの「私のなかにもう一人の私がいる」という言葉に見られるごとく、激烈で易変的な『相反的な二面性』がよく現われている。自己が統合される前の混沌とした状態である。それは家族や社会との対峙や自己内界の探索を通してこそ可能になる漸進的な再統合であり、「真実の

自己」の「再生一独立」を求めてやまぬ苦闘であった。

ところでYの秘密体験は、予期せず外から侵入してきて受身的に持たされざるを得なかつた凌辱の秘密である。Yは、その秘密に押しつぶされる危機に瀕しながらも、むしろ秘密の重さの危機ゆえに逆にその秘密の中に外界からこもる形で、積極的に自己の変革に取り組むことができたと考えられる。そこには、「受動的・被害的な秘密」を主体的に引き受け、「能動的な意味ある秘密」へと転化できえたYの実現傾向 *actualizing tendency* や力強い健康性を感じ取ることができる。

Yは、校則違反や家出という親や周囲を騒がす事件によってこそ「優等生・模範生」イメージを堕としめて心理・社会的に虚偽的自己に決着をつけ訣別でき得たのである。それは「優等生・模範生」という光の部分を生きてきたYが、全体性を回復するための『影の反逆』(河合, 1975) であったとも言えるのである。

2. “私には言えない秘密がある” —クライエントの秘密と治療者の秘密—

青春期危機に外傷体験（顔の火傷と性体験）が相乗してYは、しばらくアイデンティティ混乱の状態に陥っていたと思われる。例えば、一丸（1975）が報告した症例の自己喪失感－肥大した自尊心、見すかされ不安、適切な対人的距離のとれなさから生じるのみ込まれ不安ーが、認められている。また Erikson, E. H. が記載した勤勉の拡散や時間的展望の拡散に似た状態が、現われていたと言える。それは、性的強要体験（秘密）がYの存立基盤にいかに大きな打撃を与えたかを物語ものである。

そうしたYにとって「今ちゃんとやっとれるのは、その人がいるから」という「公務員の人」の存在は、自己の再統合の過程で大きな意味を持った。彼は24歳で、Yが高校1年生の時電車の中でカバンが当ったのをきっかけに知り合った。彼も在学中はいろいろなワル（学校さぼり、家出など）をやったという。彼には恋人がいるが、Yにとっては「いいお友達」であり、「一番大切な相談相手」であり、彼には「すべて話した」とも語った。

Yが語った対人関係のなかで教師、ボーイ・フレンド、級友、チンピラ、変な人（痴漢・変態）などが登場した。だがとりわけ対照的であったのが、親と「公務員の人」の態度である。以下、面接過程でYが語った両者の態度の認知を対比してみる。

a) 親の態度の認知：

「表面的なことばかりうるさい。思っていることや気持を言わず、違うことを言う。遠慮している。ズケズケ言ってくれればいいのに。型にはめて見て、信じてくれ

ない。妹達と対等な眼で見てくれない。」（1回目）

「家では頭から押さえられる。私のことを思ってくれてはいるが、くい違ってる。親には本当のことを言えない。話すと、そんなこと口に出すもんじゃないとはね返ってくる。常識をクドクドと言う。答を要求してるわけじゃない。聞き流してうなづくぐらいにして欲しい。表向きはカッコいいこと言ってるけど本心は違っているんじゃないかな。物質的にはやってくれるが、心理的には何もやってくれない感じ。要するに私を信用していない。」（2回目）

「信用されなくて、なんかやりかけるとふさがれるという感じ」（3回目）

b) 「公務員の人」の態度の認知：

「すごく真面目で、色々考えてくれる。私の悪いところをパッパッと指摘してくれたり怒ってくれる。強制でなく考えさせてくれる。私の意思を尊重してくれる。悪い面も認めてくれて逃げない。わかってくれている。」（1回目）

「思ったことをパッパッと言える。言ってしまっても後悔しない。いっしょにいてもプライドを全然感じなくてすむ。本当のことを話せるのは、公務員の人しかいない。不思議?! 全然逃げないし、口が堅いし、正義派で…。わがままが言える。」（2回目）

「じっと見ていてくれる人がいい。わがままが言える人がいい。」（3回目）

このように見えてくるとYが心から求めており、かつ促進的なのは、基本的には Rogers, C.R. (1957) の治療的態度条件（自己一致または純粹性、無条件の積極的関心、共感的理解）に集約できうる対人的態度であることが確認できる。

ではクライエントであるYが治療者との間で経験できた対人的態度は、どのようなものであったのであろうか。

3回目の面接においてYは時間の延長を申し出て、「私には言えない秘密がある、それを言はずに話しているのは許せない」と表明せざるを得なくなった。この回までにひととおりの自己確認を終え、いよいよ本格的な自己探究 self-exploration を深めるかどうかの分かれ目であったと思われる。Yはその岐路で「来ない」ことを選びとったのである。Yの決断が表明されたことは意味があり、尊重して認めた。秘密があると話してくれたことは嬉しかったし、来ないという決断の承認は、クライエントの秘密を秘密として尊重することでもあったからである。また、Yは、親には「教育センターでない場所で会いたい」とか「親戚や隣りのお兄さんならいいけど、心

理学の先生と思うと…」と語っていた。後の手紙にも「本当は毎日でも話すことができたらうれしいのですけど…中略…テープにふきこむことをやめて速記もやめて友だちのように話すことができたら、何もかも話すことができたのか…自分でもよくわかりません」と書いてあった。

クライエントとの関係のなかで問題であったのは、実は治療者もクライエントに対して秘密をもっており、そのことをクライエントに言えなかったことである。治療者は、インテーク面接時に父親から性体験の話を「絶対秘密にして欲しい」と聞き、はからずもクライエントに対して秘密を持つことになった。クライエントの秘密を知ると同時にクライエントに対して秘密をもつことになったのである。秘密の内容の重さもさることながらクライエントに対して秘密を持ったことが暗々裡にひっかかり、治療者の動きをどこかぎこちなくさせていたと思われる。クライエントへの一種の負い目を感じていながらそのことを卒直に伝えられないでいたのである。クライエントとの関係のなかで治療者がからずしもリアルでなかしたこと、それは治療者の態度条件のひとつである自己一致 congruence または純粹性 genuineness の問題である。従ってクライエントに秘密をもつ治療者は、クライエントに「やっぱり先生は先生、遠くに感じる」と言わせることになったのである。クライエントが「私には言えない秘密がある」と言った時、治療者がYと治療者の秘密に関して自らの体験過程 (experiencing) に基づく自己表現ができていれば違った展開も期待できたかもしれない。

青年期のクライエントとの治療的態度に関連して、性という領域や「治療者—クライエント間の性的構成」の問題があるが、他の機会に論じたい。
(伊藤)

III. 社会参加を前にして足踏みをした女性

われわれは先に報告した「序説」(1977, 95ページ)において、次のようなことを述べておいた。つまり「青年期は“自我の発見”，“第2の誕生”の時期といわれるよう、要するに、それまでより即自存在的であった子供時代から脱して、より対目的な意識存在的あり方のうちにに入り込む時期である。すなわち、この間にあって“私は”私がまさにそれ自体であった身体”から一旦疎外され、そののちにまたこの身体を“所有”し、再びこれと合一しなければならない。こうして、私はこのような顔をもち、このような体躯をもっているということが、改めてこの時期にかすかな驚きをもって、あるいはまた“私

は私に他ならない”ということの強烈な“自我体験”として経験される。内側から湧き起ってくる漠然とした“異性への関心”や統制しがたく得体の知れない“性的衝動”は、このことに一層の拍車をかける。私にとってのこの身体が、疎外の異和感ばかりを残して、うまく所有されえないというようなこの課題の失敗は、この時期特有の様々な身体にまつわる精神症状（たとえば醜形恐怖、体臭恐怖、対人恐怖——すなわち身体を所有するがゆえにまなざし、まなざされることの問題化——、心気症、セネストパシー、および無食欲症——すなわち身体的存在であることを無化しようとする絶望的な試み等々）として出現てくる。(中略)

さらにまた、自己に対してだけではなく、他者にも世界にもその対象化的意識的まなざしは向けられる。私はこの世界の中で、まさに他ならぬ私であるという同一性感覚をもちうる時に、私は“自己決定”を下すことができるし、また同時にその逆も成立する。こうした自己と世界との対決が可能となる具体的経験的契機は、異性との対峙であったり、進路・進学の決定であったり、就職状況であったりもしうる……。」

さて、ここでは上のようなわれわれの立場の展開として、実例を提起し若干の考察を試みることにしたい。症例は就職という形式において社会に参加すること、および性的存在性をひきうけることという青年期の課題に直面して一過性の危機状態を経過した比較的軽症の女性である。その際、こうした課題がなぜ彼女にあっては危機を誘発する状況になったのかということ、あるいはまた女性に特徴的な問題性があるとすれば、それはどのようなことなのかといったことに焦点があてられることになる。

1. 症例の概要

症例 2 Y・O 来院時17歳の女性

1) 主訴 登校拒否、自殺企図、抑うつ状態

2) 家族構成 彼女は5人同胞の第2子、次女である。下には順に妹(15歳)、弟(13歳)、妹(11歳)がある。父親は宗教家であり、厳しくいつもきちんとといいといけないという性格。無口であるが怒ると怖い。育児は母親まかせ。子供と一緒にしゃべるようなことはなく、どちらかといえば他人行儀な感じで、子供達は窮屈がっているという。この父親には家庭の外に特定

の女性との関係がある。

母親はそうした夫に忍従する古風な家庭女性で、物事にけじめをつけることを重んずる。Y子には過保護というのか「あまりにかばいすぎ」て何もさせなかつたという。彼女はY子について次のように述べている。「私達が古い考え方ですから、控え目であるのが女らしいというようにして、そういうことはよくいってました。外へも出さず、友達ともつきあわせないというふうで今まで抑えすぎた面はあります。とにかく自由を束縛してきたとは思う。外とのつきあいが全くないもんですから…。Y子は、駅で切符をどうやって買ったらいいかも分らないし、買物にもお使いにもいったことがないので、就職してお使いにいけといわれたらどうしていいのか分らないといっていました。」

21歳の姉は気がきつくて、しっかりした性格。高校時代は進学希望だったが、親から反対されて現在は会社に勤めている。Y子が就職のことを相談しようとしても、彼女はとりあってくれないという。

3) 問題の発生 Y子は高校3年の12月下旬、母親に伴われて病院を訪れた。初回面接のとき、彼女は終始うつむいて涙ぐんでいたが、その表情は年令よりもかなり幼くみえた。治療者が今は無理に高校にいかなくともよいこと、ここでの話は秘密が厳守され、たとえ親や教師に対しても、われわれは決してこれを洩らさないことを伝え、「両親や学校に対して何か要望はないか、もしあれば、それを君の希望としてではなく、病院側の要請として話してあげよう」と問うた。それについては小さく首が振られたが、彼女はその後の質問に対して涙をぬぐいながら、ぱつりぱつりとそれでも彼女にしては精いっぱいにその心境を語った。

彼女は中学時代、あまり成績はふるわなかったが、高校に入ってからは努力して1・2年生時にはクラスのほとんど最上位にいた。高校は私立の女子校であり、その生徒の大半は就職希望で、彼女の組も就職クラスであった。夏休み明けから就職問題が具体的になってきて、彼女は教師から銀行を勧められたが、難しいという理由で親に反対された。この頃から彼女は胃の調子をこわして学校をぼつぼつ休むようになる。そして10月のはじめ、突然死にたいといいだして、手首をカッターで切り、周りのものを驚かせた。その後登校したりしなかつたりの日が続き、12月に入って全くいかなくなつたため、病院に連れてこられたのであった。

彼女の訴えをまとめると、おおよそ次のようになる。

「学校をやめたい。友達の中に入つていこうとしても入れないし、しゃべれない。孤独になりたい、人とも話さたくない。授業中にやっていることがまるで分らない。テレビ見ても家族の皆は笑っているけど、どうしておかしいのか意味が分らないから笑えない。歌も何回聞いても分らない、9月以前はそんなことはなかったのに。そのうちに就職のことが出てきて、先生からどういうところへいきたいかと希望をきかれはじめたが、その頃から友達は皆、段々就職が決っていくし、まさかあの子がと思うような子でも受かってくるのに、自分だけ取り残されて、自分は駄目だと思い出した。就職はしたかったけど、面接があると思うと、どうしても入社試験が受けられなかった。多分あがって何もしゃべれないだろうと思った。もう就職なんていいわという気持だった。それから学校へいってもつまらないから早引きしたり、休んだりした。学校へいっても、皆男の子の話だとかしている。自分にはそういうことが全然分らないから、それも嫌だった。皆は今度デートするとかいっているけど、自分には相手もない。以前、友達が紹介してあげるといってくれたが、どうやって話したらいいのか分らないから断った。ボーイ・フレンドのいない子でも、好きな歌手のコンサートにいったりして話題は豊富だった。皆は色々なことをたくさん知っているのに、私は何にも知らない。皆の話をきいていても、何をいっているのか分らなかった。それが皆、悪口にきこえて…。今はただ死んでしまいたいだけ。何もしたくない。何も食べないで寝て死にたい。まだ学校にいっている頃から、毎朝地下鉄にとびこもうとして、それができずにまた乗っちゃったという気持で学校へいっていた。」

〈自分が女であることについては?〉「前から女に生まれたのがよくなかったと考えている。男だったら、もっとパツッとできるのにと…。それよりも自分は人間に生まれてきて嫌だなと思う。小鳥みたいにずっと籠の中にいたい。前は可愛想だと思ったけど、今は小鳥がうらやましい。」

この籠の中の小鳥のようでありたいという言葉は登校拒否者の心境を端的に物語っている。また彼女は「赤ちゃんはいいなあとと思う、だってただ寝てるだけでいいでしょ」とも述べているが、12月下旬の第2回面接の時も大体同様で、この言葉のようになつて彼女はほとんど終日就寝して泣いているという退嬰的な状態のうちにあつた。

2. 経過

年が明けて1月初旬の第3回面接では、幾分元気を取り戻してはいたものの、家事の手伝いのことで妹達とトラブルがあつたりして、やはり涙ながらに「死にたい」と語られた。

次の面接では「蒲団には早く入るけど、なかなか寝つけない、ぬいぐるみと一緒に寝るから、クマさんに死にたいといって泣いているの……これは昨日やったの」といいながら、手首の傷を見せ、「このことは誰も知らないから、お母さんにはいわないで」と訴える。この時も母親は同伴してきていて待合室にいたが、そのあとでの母親との面接の時、多少の不安は残ったものの、彼女との約束通り彼女がまた手首を切ったことには触れないでおいた。

しかし、その次の第5回面接に彼女は思いの外、元気な様子であらわれ、「もうやらなかつたよ、死のうと思うと入院しなければならないから、思わないように部屋を掃除したり、廊下ふきをしていた、昨日は刺繡の材料を買ってきて貰つたの、2・3日前には友達が2人きてくれて、今度どこかへ連れていってあげるといつてくれた、学校にはいきたくない、友達にも学校やめるといったら、自分がいいんならそれでいいといつてくれた」と述べている。この回には、まだ起床が昼前であるため、もっと早く起きることと次回からひとりで来院することの2つが約束された。

そのあとの母親との面接で、彼女は学校をやめたいといっているがと問うと、母親は次のように述懐した。「やはり高卒の免状は欲しい。それがないと、縁談とか色々な面でさしつかえるのではと思う。世間体に恥かしくないようという古い面が強いので——、どうしても抑え過ぎてしまうかもしれないけれども、私としては折目切目をはっきりさせたい方なので、中途半端でやめるのは納得できない。今はほとんどの方が大学とか短大を出でられるので、高校も出ないでやめさせるのは、親が責められるようで、そんな子供にしか育てないのかと世間から批判されそうだし、主人からもしつけが悪いと叱られるような気がして……、私自身が一番負担に感じているのかもしれない——。」これに対して治療者は、しかし今は学校学校といわないこと、この段階では休学もやむを得ないと思われるることとを伝えたが、これらの点については家庭でも一応の配慮がなされているようであった。

1月下旬の第6回面接以降、彼女はひとりで来院するようになった。高校は正式に休学にされた。この頃から

彼女は次第に元気になり、治療者の勧めに従って、はじめは母や姉と共に、そのうちにひとりで、買物や外出にも出はじめだし、「人が一杯いると怖い、何かしらないけど胸がドキドキする」といしながらも、はじめていくつかのデパートを巡ってきたり、食堂に入ったりしていた。また友人達も遊びに誘ってくれたりもした。家ではクッション・カバーの刺繡に励んでいたが、彼女はそれを夜遅くまで起きて完成させ、2月の中旬、学校に出かけて担任の先生にわたし、大いに喜んで貰つた。あとで彼女はこのことがすごく嬉しかったと語っている。

第9回面接では、母や同胞との間にちょっとしたいざこざのあったことが語られた。「姉は勤めているし、妹は受験勉強中だから毎日蒲団をひいてあげてたけど、昨日はしなかつたら、病気が治ってきたらいばるとか文句をいっているのが聞こえてきて腹が立った。いつも褒められることがなくて、何しても反対のことをいわれる。毎日掃除していて1日しなかつたら、家にいるばかりはどうとか、自分のことしか考えないとか——。

私は学校にはいきたくないです。それなのに母は高校にいけとか運動不足になるとかいうので、そんなこというんだったら働くわといった。外に勤めに出るのはまだ自信ないから家で内職のように働くといったら、以前、夏休みに家でやった封筒書きのアルバイトで病気になつたんだから、内職はやらせないといつている。私が何かしたいということを受け容れてくれればいいけど、どんなことも全部反対する——。」

そして、3月上旬の第10回面接に彼女は生き生きとした表情であらわれ、「4月から私、学校へいくことにしました、今日先生に会つたら、びっくりさせようと思って」と悪戯っぽく笑いながら語ったのであった。「新聞の就職欄みると、皆高卒と書いてあるし、友達に電話して学校でいついつに何があるとか話すでしょう。そうするとやっぱり学校へいきたいなと思って。」2月下旬の卒業式の日、皆に会いたくて学校にいき、その時先生に来年やりなおすこととを誓つたのだという。

「2年の人も知っているし、やれると思う。嫌になつたら趣味とか楽しいことをやれば早く治る。今度は入社試験どこでも受けます。

今まで、夏なら海水浴とか色んなところへ遊びにいきたかったけど、皆禁止された。ボーリングにもスケートにもいったことがない。いつも母が駄目という。友達といふといけないと思うんじゃないかな。でも今度、泊りがけで京都にいくんです。何でも体験しなけりゃいけないでしょう。いきたいといくらいてもきいてくれない

から、黙っていって黙って帰ってきます。だって、ギャンギャンいわれたら何もできないから、体験したという話がないんです。社会に出ていないというのか——。この間も新聞みて母と一緒に四国にいこうといったら、遠いから駄目といっていた……。」

彼女はもう病院に来たくないと述べたが、治療者にももはやその必要はないと思われた。こうして、この回をもって彼女との面接は終結にされた。

終結してからちょうど1年ののち、たまたま偶然的な機会もあって、結果的にフォロー・アップが行われたが、彼女は完全に学校状況のうちに復帰していた。この折、彼女はすこぶる明るい様子で、次のように語っている。「あれからは休まず通学して、今は就職も決まりました。4年も高校にいったから、もう自分で働いてやっていきたいと思います。就職も自分で決めてから親に相談しました。友達ともよく遊びにいき、今は人とつきあうのが楽しい。母とは何でも話しますけど、親兄弟よりも友達の方が大切だと思う。毎日の生活はすごく生き生きして充実している感じ。初対面の人でもすぐ話せて、友達の輪がどんどん広がっていくのが楽しい。前は逃げよう逃げようとしてました。どんなことからも逃がれないと、自分からぶつかっていかなければいけないと思う。今は学校へいくのが楽しくてしようがない。」

3. 考 察

彼女が登校できなくなった直接の理由は、就職試験が受けないことと異性についての話題が嫌だということであった。そこから彼女はかなり急激に内閉、抑うつ、希死念慮、一過性の自明性喪失の状態に落込んでいった。この社会参加と性的存在性のひき受けという事柄は、基本的に個人の主体性のあり方が問われる青年期の重要な課題である。しかしながら、誰しもが直面せねばならないこうした課題において、なぜ彼女は危機的状態に陥らざるをえなかったであろうか。

われわれ（1977, 103ページ）は、かつて次のように述べた。「青年期が危機的となりうるのは、根底的な、あるいは実存的な次元における“自己と社会への対決”と“自立、自己決定”への内的な構えが、生活史的に未だ充分熟してはいないにもかかわらず、現実的にそのような課題に直面せねばならないような場合においてである。」就職して社会に出ねばならないということ、そして最終的には結婚という形式で異性に受け容れられうるひとりの「女」にならねばならないということは、自然な成熟

状況に伴なって自生的にあらわれてくる根源的なノエシス的自己の側における *Müssen* としての漠然とした予感のようなものであろう。しかし彼女のノエマ的な経験的自己は、具体的現実的にその課題に見あった行動を起こすには、あまりにも幼稚で不器用であった。彼女はひとりで買物にいったこともなく、友人と遊びに出かけたこともなかった。彼女自身、そうした主体性の要求される事態がさしつけまくる中で、「私は駄目なんだ」としてそのことを自覚せざるをえなかった。彼女の社会的技能の未熟さ、体験の欠乏性は信じ難いほどであるが、それでも彼女は高校3年の夏までは何とかやってくることができた。学校社会も無論、第2次集団ではあるけれども、周囲の期待に沿ってかなり受動的なままに参加することもできる。しかし、いつか能動的に自己決定せねばならない時がくる。彼女がそのまま自動的に——それはむしろ他動的に——ということなのであるが——大学や短大にすすむことになっていたのであれば、事態はもっとあとに引き延ばされたのかもしれない。彼女の社会的技能の未熟さは両親の「女は控え目にと考え、かばいすぎて何もさせず、友達とも遊ばせない」というしつけの方針によるものであった。母親は「若い頃にはよく修道院や山の中にこもりたいと思った」と述べているが、彼女自身社会性の巾は決して広い人ではない。Y子の社会性のあり方は、こうした母親や無口で怖い他人行儀な父親によってつくり出された閉鎖的で窮屈な家庭自体の社会性のありようがそのまま彼女のうちに伝達されたものだということ也可能よう。また母親は妾のある夫の妻としての不安や不満によく耐えてきたが、その分、子供にだけは愛情を注ぎ、しかも世間的に後指をさされることのないよう、けじめだけはきっちつけるようにと子供達に要求したのであろう。Y子はそれによく従ったが、勝気な姉は自由にふるまっているという。

彼女はその課題状況にいき結まり、己のノエマ的自己に絶望した時、「出ていかない」という最も未分化で退行的な防衛手段を用いた。「人間に生まれたのが嫌だと思う」として、彼女は籠の鳥にあこがれ、こうした葛藤を覚えなくてすむ赤子のようでありたいと願う。希死願望もこうした退行的な意味方向上にあるものであって、決して決定的最終的な自己確認という性格を帯びるものではない。こうして内的には成熟的事態へと出ていかねばならないと分っているにもかかわらず、現実的にはそうありえず、未分化で退行的な内閉的状態に陥らざるをえないところに、登校拒否の本質的な二重構造が存している。

治療状況においては、この経験的ノエマ的自己をどう再構成させうのかが重要となる。さしあたりはまず、「無理にいかなくともよい」として Müssen の要請が猶予され、巣ごもりが保証される。その中から彼女はやがて恐る恐る外に向けて歩み出し、少しづつ社会的体験を獲得していった。この時期、両親は「怖いほど優しかった」といい、教師も級友たちも協力的であった。しかし彼女が高校に復学するのにあたって、最も重要な契機となったと思われるのは、彼女自身それが「すごく嬉しかった」と述べているように、一生懸命クッション・カバーの刺繡をし、それを教師に喜んで受けとめて貰えたことにあるのであろう。というのも次のような事情によると考えられる。性的存在性を自らに引き受けるという課題に関して、男子青年にあっては性的感情はより直接的、身体的に性器と結びついており、それだけにそれを社会的、心理的、実存的な一個の「人格」全体に統合していくことはより困難である。そうした場合、身体感覚としての統御し難い性衝動性は異質なものとして乖離されやすく、彼の存在全体そのものを震撼させることになりやすい。これがこの時期に強迫神経症や登校拒否、対人恐怖や無気力な応等がより男性に多く、しかもより治りにくうことの一因であろう。これに対して、青年期の女子の場合、性的感情性はそれほどには身体化されてはいない。むしろ、それは第一義的にはどれほど自らが世間や異性（まだ実在していない架空のものであっても）にひとりの女性として好かれ、受け容れられるものでありうるのかという社会的次元に広げられた自己愛的受容欲求の形であらわれてくる。実際、彼女らは恋人やボーイ、フレンドと楽しく過ごしたいとは思っていても、身体的に男性器がいきなり侵入してくることに対する脅威を感じている。Y子は「結婚なんかしなくてもいい」と述べ、どうしてと訊かれると、「相手がいないから」と答えている。このように女子青年の性的感情が社会的自己愛的受容欲求の形をとることから考えて、彼女が刺繡に熱中し、それが教師に受け容れられたことには象徴的な意味が存している。すなわち、彼女は刺繡という女性的な役割行動をとることによって、アニムス的な態度を確立したのであり、それが受け容れられたことにおいて自尊感情をとりもどすことができたのであった。そしてついに彼女は「何事にも自分から積極的にぶつかって体験しなければならない」として、ひとりで旅行にも出るほどになる。

社会の中に出て立たねばならないということは、本質的に男性的な課題である。その別での足踏みを、彼女は

女性的役割行動をとりうるノエマ的自己の体験を積むことによって乗り越えた。結局、この時期、男子は男性としての、女子は女性としてのノエマ的自己を確立せねばならないのであり、その難易度はそれ以前の経験的自己の形成のされ方に、いいかえれば環境的・社会的要因がどの程度、彼の主体的な自己体験を保証し受容してきたのかということにかかっているが、それにもまして、性差の相違は大きいように思われる。女性の場合、受動的、依存的、順応的であることとひとつの女性的役割行動として、多くの場合むしろ積極的に容認されるのに対して、男性の場合にはつねに能動的、主体的でなければならず、その Müssen としての要請は比ぶべくもなく大きいからである。ここにも、男子の青年期危機がより深刻であることの理由が存している。

（池田）

IV. 蘭の世界にやすらう少女

1. 症例の概要

症例 3 I・S 女子 初診時年令 16歳(高校1年)

1) **主訴** 同一性障害：「お父さんの性器とお母さんの性器がまざりあっている、男か女かわかんない。」

2) **問題の発生と経過** 《父親・I・Sの供述》

高校入学して半月経た頃から、I・Sが学校で授業をさぼり医務室で休むことが多くなった。その理由は、「オナラをしてクラスの者に笑われた。」《後に筆者の質問に答えて、「自分の匂いがもれていくかんじ、」<自我漏洩>と語っている。》「皆が自分の悪口を言ったり、よくない噂をしている」<被害念慮>ということであった。5月に入り、“acting out”が始まった。深夜、雨の中を飛び出し、見知らぬ他家に入って、「家は厭！ 学校の先生に連絡して！」と大声でわめく。《結局その日は学校で一泊することになった。》別居中の母の実家へ無断で出向き、帰宅途中一人抜け出して公園で素裸になり、ドブ水で顔を洗ったり、地面を転げ回っているところを近所の人の通報でやってきた警察官に保護されるといった事態になった。《いづれも「家へ帰る途中」の出来事であり、帰宅拒否がみられている。》

6月に入ると、「自分は男だ、性器がおかしい」と訴え、父に調べて欲しいと強要、仕方なくこれに応じた父に対して、「お父さんに性的いたづらをうけた、指をつっこまれた」と被害的に語っている。さらに土を家の中へ運んだり、素裸で飛び出したり、父・弟に乱暴を働く等の行為が顕著となって当院を受診することになった。《I・Sに

は、「当院には婦人科もあり、お医者さんに性器を調べてもらおう」と偽って来院させている》初診のドクターに対して、「お父さんの性器とお母さんの性器がまざりあっている、私には出生の秘密があり、今の父母は本当の親じゃない」等々の訴えをしている。

3) 家族歴 入院時は父、I・S、弟の3人家族であったが、現在はI・S入院中、弟は父の実家へと一家は離散している。両親は本人が中学1年の時母の蒸発により別居している。別居以前の家庭の雰囲気は、父親が2人目《弟》が母の腹にあった頃、若い女性と恋仲になり、東京へ蒸発するといった事件があった。結局父は家に戻ったのであるが、夫婦仲は悪く、いつも喧嘩が断えなかった、時には父による暴力行為もみられたという。父親の性格は几帳面、執着的、頑固であり、他者侵入的などころがあり、口やかましい。一方、母親は父親とは逆で給料のあるうちは豪華な食事を作るが、給料がなくなると御飯に塩をかけて食べさせるといった風にルーズなところもあるが、概しておおらかで、子ども達には優しい母と映っている。しかし、この母親は子育てよりは、自分の楽しみを追求するタイプで、父がタクシー運転手で夜帰らないことをよいことに、幼い子供2人を家において、客商売の仕事へいそいそ出かけることがよくあったと云い、このことも夫婦喧嘩の種になっていた。この母はI・Sに、物心ついた頃から、「おまえが中学生になったら家を出ていくからね」と言い聞かせてきた。そしてI・Sが中1になった年、実際に蒸発をしている。その後は水商売に入り、父親には内緒でI・Sと会っていた。母はI・Sに会うたびに父の勤め先のタクシー会社を聞いて、父に会わないよう用心していたという。

I・Sは母なきあと、一家の母がわりとして、こまめに家事を行ってきた。

4) I・Sの生活歴 I・Sの病前性格は父に似て、几帳面、執着的で頑固な面もみられたと言う。出産・発育は共に順調で著患はみられない。対人関係の面では幼児期より、おとなしくて無口、目立たない（影の薄い）存在であり、限られた同性の友人ともひかえ目なつき合い方をしてきたと考えられる。学業成績は中の下から下位にあった。両親共教育に関心が薄い、家庭のゴタゴタからとても子どもの教育にまで行き届かなかったのが実情であったろうと考えられる。

両親別居後、I・Sは母の代役をすることになった。家事そのものは苦にはしていなかったが、しかし、父に隠れて母と会っているという父に対するうしろめたさ、（秘密の保持）はかなりの重圧としてのしかかっており、そ

れへの補いとして、いつも心の底で「早く元の四人家族で暮したい」と願いつづけていたと言う。又、中2の頃、ある新興宗教の信者から、「入信すれば母は戻ってくる」と入信を勧められ、父の意志で本児・弟も入信、その後は毎日、欠かさず勤業を行ってきたという。（I・S発病において、この宗教への盲信と、経本を破る＜不信の表明として＞ことからくる罪業妄想は一定の役割を持っていた。）

2. I・Sとのサイコセラピーの過程

I・Sは現在も入院中であり、治療は継続している。症状的には離人感を訴えるも日常生活レベルではほぼ寛解状態にあるといってよい。しかし、社会へ巣立つには今一步のためらいがあり、繭の中にやすらっている。そのためらいこそ、I・Sの病因の奥深さを物語っているといえるであろう。

ここでは、筆者が治療的にかかわり始めた9ヶ月間を中心に、I・Sの一年間の歩みをたどってみることにする。

尚、この間42回（週1回、40分位の面接時間）の面接を行ってきたが、冗長になるのを防ぐため、便宜上5期に区分し、その概略を述べる。

I期（筆者がかかわる以前）。かなり“stormy”な時期である。病棟では看護婦にベッタリくっついて離れず、「おねえさん、おねえさん」と呼びつづけていたし、夜になると素裸になって他の患者さんのベッドに入って、「ホテルに連れていってヨ」と言ったり、年上（30歳位）の女性とレズビアン的行為を行っていたりした。それも何かせっぱ迫ったような、強迫的な、真剣な表情であった。（こうした行為について、筆者との最近の面接で本児は、「あの頃はともかく人が恋しかった、直接人と人の肌の触れ合いを求めていた。」と語っている）又、主治医に対しては、世界没落体験や主治医（女性）と自分との境界がなくなり「主治医の身に危険がせまっている」等々華々しい病的体験を語っていた。

他者と密着することで、ともかく安心感を得ようと必死の努力を一虚しい結果になろうとも一行った時期である、しかし、同時に、思春期における性衝動（身体的な意味を含めての性的存在であること）の行動化した時期でもあったと考えられる。

II期（1回目～5回目）。筆者の治療的関与が始まる。依然として stormy な時期、「四人で暮したい、駄目だつていっても4人じゃなきゃいや！」と regress したかんじで訴える。罪業忘想（某宗教の大切な紙を破ったので自分は罪をうけるのだ）、体感幻覚（虫が身体をはい回

っている），自我漏洩体験（幻聴の内容が外へもれていってしまう）離人感（自分が自分でないみたい，生の感情が湧いてこない）等々を訴える。

筆者はI・Sの訴える様々の不気味な内容についてゆけなくなり、「気分が悪いから面接をここで打ち切りましょう」と言わざるを得なくなつた。事実、吐き気がし、胸が痛くなつたのであった。この時期筆者は＜本児の訴えをどううけとめてよいのか＞にとまどい、又、診断的に分裂病なのか、境界例か、psychogenic reactionか、思春期の一過性障害なのかで迷う。

Ⅲ期（6回目～11回目）：離人感が強く訴えられ、さらに「私、本当に治るかしら」といった将来への不安を強くもつようになつた。やや現実感を取りもどしたのであろうか。その一方で、「病院が家みたい、家よりもここの方がいい」と語り、病院（治療者も含めて）への依存を強くさせ、一層 regress した印象を与えるようであつた。病棟でも最年少のI・Sは看護者・患者からも可愛いがられていた。

この時期、Ⅰ期・Ⅱ期の stormy な状態からは脱し、やや落ち着きをとりもどしたようであった。しかし I・Sに過去の体験について質問を発すると驚いて「そんなことしたの！」と不安を表明した。筆者は病的体験に触れるのは時期尚早と判断し、I・Sのペースに合わせるべく、時期を待つしかなかった。

VI期（12回目～20回目）：筆者は直接に病的体験に触れず、絵画・夢などを手掛りにしてI・Sの内的世界に迫つていった。絵（12回目）：大きなキノコと小さいキノコ（幻想的で可愛いらしいものであるが、一方で性的な象徴を連想させるものであった。）夢（17回目）「弟が私に sex を求めてくる。素裸であった。」（近視相姦願望 I・S の性的関心のあらわれ、しかも対象が家族の範囲を越えない対人関係の狭さを示している）、夢（20回目）「自分がウルトラマンに変身した、しかし、変身は上半身だけ、下半身はそのままなの。」（変身願望、身体的な意味をおびたI・Sの女性性のあり方が問われている。）

一方、この間に、I・Sの置かれた客観状況は「本当は4人で暮したい、もし離婚になったとしても母と生活したい」と言うI・Sの意志は無視され、正式に両親は離婚し、親権者は父となった。さらに学校側からは、規則により退学願いを提出するように、と言つて來た。父もこれ以上休学していても復学の可能性は薄いとして退学届を提出し受理された。このように、I・Sの意図とは別個に進行し、I・Sはその結果だけを受身的に引きうけることとなつた。

この時期、筆者はI・Sの頭越しになされる諸々の決定になす術もなく、I・Sと共に将来の不安を語り合つた、ともすれば暗くなるI・Sに対して、できるだけ陽気に、明るく、supportiveに働きかけた。

V期（21回目～29回目）：I・Sはますます病院に依存的になり、院内作業のサボタージュが目立ち（I・Sも自覚しており、舌をペロッと出して筆者に甘える仕草を示したりした）、赤字の増大にもかかわらず買い物注文を多くしたりした。これらはIV期のI・Sがおかれられた状況に対する反応であったろうと考えられた。しかし、筆者は、退行し、社会に対して withdrawal になっているI・Sに不安を覚え、「病院はあくまで仮りの宿であり、あなたが帰るべき本来の場所は家だよ」と社会へ押し出すように積極的に働きかけた。（院外ナイト作業へも勧めてみた。）それに対してI・Sは、「お父さんと同じことを云う、退院しなくちゃいけないことはわかっている、でも、今の状態じゃ、退院もムリ、院外ナイトもムリ！」と反発し、筆者との面接場面で次第に暗い表情を見せ始めた。そして集団精神療法を担当のMセラピストに、「E先生（筆者）は私を早く退院させたがっている」と語り、その後の筆者との面接で、「M先生に先生のことでウソっていうか、間違ったこといっちゃった！、先生怒っていないか心配」と、筆者を試すような眼差を向けたのである。筆者はいたましいI・Sの反応のあり方に、＜自分が焦っていた＞と反省させられた。自分の焦りがI・Sを苦しめ、こうした動きに出ざる得なかつたのだと悟つたのである。（繭の世界の大切さ）

そこで、筆者は一応自分の考えを説明したあと、自分の態度・あり方に間違いがあったことをわび、今後はI・Sの意志を最優先させることを約束した。

この時期、筆者のあせりが何であったのか？、ひとつには、I・Sの病院への退行、怠惰の出現、一向に改善されない離人感の訴え、等々にやりきれなさを感じていたこと、そして他には、父との面接において、筆者が父に同情し（この同情については、主治医O先生《女医》との間で、両親に対する見解の相違が影をおとしていたという事実が背景にあるが詳述は避ける）、父の立場に立って、父代理をしていくことがある。青年期の患者に対する時、治療者は特に家族との距離のおき方に注意をおかねばならぬことを改めて痛感させられたのである。この時期、I・

S.は夢(27回目)をみている。「自分が中2の時に使っていたスリッパをはいていた、するとそこへ母が登場し、『まだそのスリッパはいているの』と言って近づいてきた」という内容であった。I・Sの心の中で筆者の存在が危うくなつたとき、無意識の中で母を呼び寄せていたのであった。筆者との治療における危機的な場面であった。

VI期(30回目～42回目)：離人感はあるものの、そのことにはあまりこだわらなくなつた。むしろ、容姿への気づかい(髪の型を変えたり、前歯の治療を要求したり、ニキビの治療を頼む、等)、女性らしい軽作業(シャツをたたみ、袋の中に収める仕事・作業療法として)や、マスコット人形作りに意欲を見せる等、女性的なあり方に気を使い出した。ある男子患者から、「女人でも愛想よくするのは大切なことだよ」とさとされたと言って、男性とも少しづつ接触をしだしたことを見している。最近(40回目)では、院外へ出たとき、喫茶店でデートしたという報告をI・Sからきいた。

この間、一週間程の外泊を行い、父との共同生活を試みている。父の話では、「病前のI.S.とほとんどかわらない生活ぶりである、話しも矛盾するところがなく、よくまとまっている」とのことであった。ただ少し気になるのは、「かってのガンコさが全くみられなくなつて、素直というのか、私の言いなりになっている、喜んでいいのかどうか、どこかもの足りない気がして…」という陳述である。又、外泊中、I・Sは中学校当時の同級生、3年の担任教師に電話をかけ、過去の失った時間を埋めようとするかの如く、彼等に会ってその後の経過を話合つたという。その際の同級生の印象について、「自分に比べて、すっかり大人ってかんじ」と語っている又、中学の担任教師はその後、わざわざ病院にI・Sを見舞い励ましを与えてくれている。この頃になると、I・Sは筆者に対して、はっきり“甘え”という形で自分の気持をストレートに表明するようになった。都合で一週間、面接が延びると「淋しかつた、ひとりぼっちになるのはいやだ」と述べたりする。

そして、筆者の側からは、そろそろ病的体験について語り合い、その意味を明確化させる必要を感じ、少しづつ語り出している。I・Sは以前のように不安を見せることはないものの、かなりの動搖を見せているが、つとめて冷静な態度でこの作業にあたっている。

筆者はこの時期、I・Sにとって、病院が繭の役割を果し、I・Sはこの繭の中ではぐくまれ、育ちつつあると考えている。

以上、大雑把ではあるが、I・Sの治療経過、そしてあわせて、筆者のその時々の治療及びI・Sに対する考え方を述べてみた。

3. 考 察

I・Sにおいて、青年期(思春期)危機とは何であつたろうか。それは急速に成長・成熟してゆく身体、性的衝動の胎動との出会いであり、親からの分離・独立すなわち出立におけるつまづきである。そうしたことの根底にあるものは、「自分とは何なのか?」といった己の存在についての問題化である。それは同一性(identity)の危機ととらえることもできる。Henderson, J. (1974)はJung派の立場から、Erikson, E. (1959)のidentityを論じ、イニシエーション(通過儀礼)の概念を援用して、次のように言っている。「イニシエーションに関するわれわれの研究から明確になったのは、性的分化が中心的な課題であり、これが新参者を明らかに解決不能な葛藤や対立物の存在に直面させ、これを解決することがイニシエーションの仕事となるということである。」

ところで、identityの用語が使われて久しく、今日では精神医学・心理学はもとより、社会学・教育学等、幅広く活用されている。ところが、岩崎(1979)が指摘するように、「Eriksonがはじめて同一性をめぐる諸問題、とくにその障害としての同一性拡散の現象を認識したのは、青年期の境界例患者の観察を通じてであった。そして、その際彼は同一性障害を自我同一性の『病理』、すなわち、精神分析的ないし、精神病理学的な臨床概念としてとらえ、出発したのであった。」ところがその後『同一性喪失ないしその重篤な障害を、個人的ならびに精神医学的な見地から検討することが軽んぜられ、むしろ、一般化した集団現象として社会学的な見地から検討することが重視されるに至っている。』すなわち、同一性障害の理解をめぐって、臨床に欠くことのできない基礎的な個体発生的視点が見失われ、青年期の一般心理として同一性障害が問われているのである。本論では、あくまで臨床的な立場から、自我同一性の形成と危機を、個体の人格発達や精神病理との関係においてみてゆきたい。本症例を提示した理由は、1. 青年期危機を病理的に発現させたこと、来院時の主訴が「私は男か女かわからない」といみじくも同一性の混乱を象徴的に語っていること。2. 筆者は精神病院に臨床の場を持っており本症例は入院という精神医療の枠内で治療がなされている

といった特異性をもっていること、しかもこのことがこの事例の場合、大きな意味をもっていたこと、等があげられる。

では次に、具体的に I・S の考察にあたってゆきたい。考察にあたって筆者は次の 3 点を取り上げる、1. I・S の青年期危機を招来せしめた状況因、2. 個体的要因、3. 治療の意味。

1. 状況因：I・S の症状発現において、底流にあるものは、父の浮気－蒸発、母の家出－蒸発に象徴される家の崩壊である。度重なる両親の不和・喧嘩は幼い I・S の心には深い傷となって映ったであろう。おそらく I・S には、ゆったりと家庭の中でくつろぐといった体験は得られなかつたのではないだろうか。そして両親の蒸発は I・S にとって、「見捨てられ体験」(森、1978) として内的にとらえられるものではなかつたろうかと考える。ただ、基本的信頼関係については、I・S が幼い頃の母のこまやかな愛情を漠然としてではあるが印象的に語っており、自他の成立(木村、1978) は可能なまでの自我発達は見せていたと考えられる。I・S の母イメージは半ば理想化された幻想的色彩をおびており、一方で非常に漠然としたものであることが特徴である。

I・S にとって、中 1 の頃における母の蒸発はただちに深刻な「見捨てられ体験」へとは発展しなかった。それは I・S の特徴でもある、幻想的な、あいまいな見方において、(内的世界において) それまでずっと継続して、また友人関係(chumship : Sullivan, H. S., 1953) がそ時点においても維持していたということに由来するのではないだろうか。さらに、親切な教師の存在も見落せない、これらは相補的に作用し、I・S にとって、「中学」というものが全体として、母代理をなしておらず、I・S の独断的、主観的なとらえにおいて、仮現のあたたかさ、親密さを感じていたのであろうと考える、但しあくまで漠然とした雰囲気性においてであったことは注意しておかなくてはならない点である。以上のこととは、回復期において、父以上に中学校当時の担任教師、友達に思慕の念を寄せていることからも推察できる。

それ故、I・S が高校へ入学した後、それ迄、かろうじてあいまいさの中で感じてきた親密さを「高校」に求めることに失敗し、白々しさ、冷たさを感じとった時、再度、「見捨てられ体験」が出現し、ねこそぎ感を味わう中で、急速に症状化し、分裂病状態を呈したのである。

2. 個体的要因：青年期危機において症状出現の個体的要因について、まず目につくのが、I・S の自我発達・又は personality の未熟さ(immaturity)である。これ

は発病後の人格変容・退行しているが故の印象ではなくて、元々 I・S のあり方そのものが年令に比して、子供っぽいところがあったと考えられる。そして、対人関係面においても、相手とする範囲は極限化され、その質的なあり方も親友と呼ばれるような間柄は形成されていない、受身的であり、おとなしく、あとについていくといったあり方であったという。このような脆弱な基盤の上で身体との出会い(木村、1978) を体験するのである。I・S にとって、身体との出会いは、2つの意味から問題化してくる。そのひとつは、「自分の陰核は大きくて、男のようだ」といった身体の形態異常不安、それへのこだわりである。それは己の身体性へのなじめなさ、身体の内なる異物感である。しかもその異和感は女性としての証しである「女性器」そのものにおいてあらわれているということは、観念のレベルで性的同一性の混乱を示す以上に、より実体的・即時的であり、有無を言わせぬ迫力で I・S にせまつてくる不安なのである。こうした身体へのこだわり、なじめなさ、異物感といったあり方は、ボーダーラインケースにおいてみられる現象ではないだろうか。

身体との出会いのもう一つの問題化は、身体成熟に随伴する内的衝動の高まりに対する不安である。自分がまぎれもなく性的存在であるということは、子供っぽさから抜けきれない I・S にとっては、全く受け容れがたいことであろう、ここに身体性と精神の統一(西村、1977) の破綻がある。I・S はその内なる性的存在性を自己化することをやめ、それを他者化させることにした。そして自分を被害者の立場に置いてからうじて性的存在のあり方を認めたのである。この性の他者化は、「好きな先生が私の胸を触った、そのことで先生は私にすまないとと思っているようだ」、「お父さんが私の性器を調べるといつて指をつっこむなどしていたづらした」といった供述になったのである。そして、やや安定した時期では夢において、「弟が裸になって、私に sex を求めてくる」といった表現となるのである。性のどろどろしたおぞましさを内なるものとしてでなく、他者化させることにおいて、I・S の選択した他者がいづれも身近な存在に限局されているのは、対人関係の未発達さに由来している。同年令の異性を性的に対象化できなくて、近親相姦的様相を呈していることはこうした青年期(思春期)症例を扱う場合、注意が必要と思われる(西園、1979)。

以上、1, 2, で述べてきた状況因、個体的要因が相互に作用して、I・S の本質的問題である同一性障害を形成させてきたのである。その基本的なあり方は、「私は一

体何者であるか」といった問い合わせが、特にその身体性において問われてきているということがいえるのではないか、その象徴的表現として、「私は男か、女かわからない」といった形であらわされたのである。

I・Sには、ゆったりと自己をゆだね、自己の成熟を安心してみつめていられる「繭の時期」が根本的に欠落していたのであった。それが「出立」を要請されつつ、「出立」できないI・Sの病因となり、これ以後、自我漏洩・罪業妄想・関係妄想・体感幻覚・世界没落体験・離人感等々華々しい分裂病様体験の世界に入っていったのである。

3. 最後にI・Sにとっての治療の意味について考察する。山中（1978）は思春期内閉という概念を用いて、青年期における「こもり」について、「外的には社会的自我の未成熟とされる消極面をもちつつも、内的には《退行》，しかもそれは次なる《新生》をもたらすための《蛹の時期》とでもいうべき積極面を併せ持っていると考えて治療への取りかかり点としたい」と述べている。筆者も、I・Sにおける「こもり」について、治療的に重要な点であると考えている。山中は「こもり」についてより内的なもの、内的世界における自我成熟・自我形成に重点を置いているが、筆者はもう少し外的現実をも含めて、「こもり」を考えてみたい。I・Sの場合、「こもり」は2重の意味を持っている。ひとつはより外的なものであり、他はより内的なものである。外的なこもりとしては、一般社会、家庭からの「こもり」として病院への入院がある。病院という枠の中で守られ、ゆったりとくつろぐことを許される、退行したあり方がそのままうけいれられる。そして、時間的にもゆるやかな流れの中に身を置き、竜宮城の浦島太郎生活を味わうのである。これは、形態的にみた「こもり」のあり方である。より実体的・具象的なあり方である。本論文の副題に、「繭の世界にやすらう少女」と付けたのであるが、「やすらう」は広辞林によれば、①休む、の他に、②ためらう、ぐずぐずする、③とどまる、立ちどまる、といった意味が含まれている。I・Sは繭（病院）の世界にただ休むだけではなく、その中でためらい、立ちどまって自分をはぐくんでゆこうしているのである。病院という繭はI・Sにとって、それまで求めつつも得られなかつたゆったりした母のふところではなかっただろうか？今、I・Sは自分をはぐくむのに必須な空間と時間を病院で得ている、繭の治療的意味は大きいと考える。

内的こもりの意味としては、離人感に表現されているものが考えられる。I・Sは夢の中でウルトラマンに変身

する自分をみている。結局は半分しか変身できないでいるI・Sであるが、これもかたいからにしっかりと守られることへの願いがこめられていそうである、それは繭ではなく、おのれをつつむ丈夫な肌、身体の外皮である。I・Sはこのかたい外皮にあたるべきを離人感として、症状的に形成したのである。この離人感という「こもり」によってI・Sは、かっての華々しい分裂病様体験の再出を防ぎ、自我の分裂から守っている。それはありたくない性的存在から目をそすことにもつながっている。それと同時に、厳しい現実の状況（学校から疎外され、家庭で淋しい生活を強られるという）へ復帰することからも防いでくれるのである。離人感の訴えを筆者は、「私が良くなるためには、もっと時が必要なの、安心してくつろげる場が必要なの」とI・Sが訴えているように聞いているのである。

では、治療における筆者の意味は何であろうか。I・Sは未だ、本質的には〈他者〉と出会ってはいない。父母のイメージも、先生、友人のイメージもいつも漠然とした霧廻気性をただよわせている。「やさしい人」、「親切な人」と抽象的に述べるだけである。それはI・Sのとらえ方がそのようにしかとらえられなかつたことであり、かつ、そうした他者との出会いしか出来なかつた親との関係のあり方に基づいているものと考える。こうしたI・Sに対して、私は〈他者〉として出会っていくことを求めている。それは“new object”（小此木、1976）である。森（1978）はそれを、「治療者は病的な対象関係を形成してきた父母の代理対象という意味でなく、治療者自身が「良い面」と「悪い面」を兼ね備えた現実の一存在としてありつづけることによって、患者を治療関係の枠の中で経験を通して吟味洞察へと導いていくことである」と述べている。一度はギクシャクした治療関係に陥り、危機を生じさせたがそれを乗り越えて現在に至っている。最近になって、I・Sは自分の気持をストレートに筆者に表明するようになり、“甘え”をハッキリと筆者に向けるようになってきている。勿論、その後にはそれまで抑圧されてきた aggression（見すてられ体験に伴い生じてきたであろう）が待ち構えているかもしれない。しかし、その際にも筆者は〈本質的に出会う他者〉として、I・Sの前に坐り続けようと思う。

（江口）

V. まとめ

以上、3例を提起し、それぞれに考察を加えた。症例1と2は一過性の青年期危機状態であり、症例3はすでに分裂病圈に属せしめうる境界例である。これら女子青

年のありようは一見、3人3様であるようにみえるが、よくみると、かなり共通した面もあることがわかる。ここではそうした共通性に関して、ごく簡単にまとめておくことにしたい。

まず第1に、症例2で考察したような、自己のうちに漠然と感じられてくる純粋経験的な、いわば本当の自分とそれにそぐわない具体的現実的な経験的自己との乖離の問題がある。それは症例1では「虚偽的自己」と「眞実の自己」の二重性としていいあらわされ、症例2では「ノエシス的自己の要請に応ええない体験不足で何も知らない不器用な自己」として、症例3では身体的性同一性の深刻な混乱としてあらわれている。

このことは、何よりもまず自らが性的規定を伴なった身体的存在であることを自己受容することの問題性としての様相を呈してくる。それは「思春期やせ症」において端的にあらわれてくるような心性と異質のものではない。症例1は中2の性的外傷体験によって暴力的に自らの性的存在性をつけられ、症例2とともに女に生まれてよくなかったと思い、症例3は自分の性器を決してなじむことのできない異物として感じていた。

こうして「女」になることの準備性はいずれの場合にも欠如していたが、それを阻害してきた背景は生活史的に家族的布置の要因にまでさかのぼることができる。症例1は母親との関係が悪く、母親の中に女性としての否定的な「損な」面ばかりをみてくる中で、形式的に姉として長女としての役割を期待されてきたし、症例2の家庭は非社会的、閉鎖的で窮屈な雰囲気の中で世間体を重んじ、主体的経験の機会を極度に制限してきた。症例3は度重なる両親の蒸発、不和と家庭崩壊のうちにみすてられ不安を体験してこなければならなかった。いずれの場合にも、よき女性modelも児童期におけるchumshipも得ることはできなかった。

そして症例1は中学時代に、症例2と3は高校時代のそれぞれ終りとはじめに発症してきたが、症例1は主として外に向けての「行動化」の方向をとり、症例2と3は内に向けての内閉化の方向をとった。症例2は登校を拒否して終日就寝し、症例3は「病院」および、「離人症状」という二重の繭の中にこもっていったが、いずれの場合も非常に退行的であり、あたかも乳幼児期に実現できなかった母親の胸のぬくもりを仮の器の中で体験しようとしているかのようである。この点、男子青年が断呼決然と、ひとつの自己実現として自らの殻を構築し、その中に積極的に内閉していくうとするのとはかなり異なっている。彼女たちの場合、こうした退嬰的なぬ

くもりを体験したのちにはやがて、比較的容易にそこから出で立っていくことができる。

それゆえに、治療状況の中で、彼女たちはあらためて女性役割を自ら取得しようとしていた。その際、軌を一にするかのように、症例1は「手あみ」を、症例2は「刺繡」を、症例3は「マスコット人形づくり」をはじめたということは興味深い。そのような女性的な手作業によってアニムス的態度を習得しながら、症例1は短大の家政学科に進むことを決め、様々な異性ともつきあい、症例3も「愛想よくしなければ」としてデイトを試みている。

しかしやはり、この時期に性的役割を獲得していくという課題は、症例2の考察で示したように、男性にあってより困難であるように思われる。男子青年にとってのそれは、もはや単なる役割という水準の次元にとどまらず、いわば存在論的な identity の中核に直結する事柄となるからであるにちがいない。

(池田)

文 献

- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle.*
Psychological Issues vol. 1 No. 1 Monograph 1.
International Universities Press, New York.
(小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 ——アイデンティティとライフ・サイクル —— 誠信書房)
- Henderson, J. 1967 *Thresholds of Initiation.*
Wesleyan University (河合隼雄他訳 1974 夢と神話の世界 新泉社)
- 一丸藤太郎 1975 自我同一性混乱の臨床像に関する一考察 —— 臨床心理学的観点からみた青年期の諸問題
(第3報) 広島大学教育学部紀要 第一部 24 ;
181-191
- 岩崎徹也 1979 同一性障害と病院精神医学 精神医学 26 : 605-612
- 笠原 嘉 1977 青年期—精神病理学から— 中公新書
- 河合隼雄 1975 影の現象学 思索社
- 木村 敏 1978 思春期病理における自己と身体 中井 他編 思春期の精神病理と治療 321-341 岩崎学術出版
- Laing, R.D. 1960 *The Divided Self—An Existential Study in Sanity and Madness.* Tavistock. (阪本 健二他訳 ひき裂かれた自己 —— 分裂病と分裂病質の実存的研究 —— みすず書房)
- 森 省二 1978 思春期と境界例 中井久夫他編 思春

- 期の精神病院と治療 189—221 岩崎学術出版
- 村瀬考雄 1976 青年期危機概念をめぐる実証的考察
笠原嘉他編 青年の精神病理 29—52 弘文堂
- 西村洲衛男 1977 増井論文へのコメント もうひとつ
の解釈 一愛の理論の立場から— 臨床心理ケース
研究編集委員会編 臨床心理ケース研究 I 106—
111 誠信書房
- 西園昌久 1979 思春期精神病理とその治療 季刊精神
療法 4 ; 214—223
- 小此木啓吾 1976 青年期精神療法の基本問題 笠原嘉
他編 青年の精神病理 239—294 弘文堂
- Rogers, C. R. 1957 The necessary and sufficient
conditions of therapeutic personality change.
Journal of Consulting Psychology, 21, 95—103.
(伊東 博編訳 1966 サイコセラピイの過程 第
6 章 117—140 岩崎学術出版社)
- Sullivan, H. S. 1953 *Conception of Modern Psychi-
atry. The First William Alanson White Memori-
al Lectures.* Norton, New York. (中井久夫他訳
1976 現代精神医学の概念 みすず書房)
- 田畠 治・生越達美・池田博和・伊藤義美・間宮正幸
1977 臨床青年心理学序説 名古屋大学教育学部紀
要 —教育心理学科— 24 ; 85—106

(1979年8月17日受理)

A STUDY OF ADOLESCENCE IN THE LIGHT OF CLINICAL PSYCHOLOGY (IV) —— Reports of female cases ——

Hirokazu IKEDA, Yoshimi ITOH, Norio EGUCHI

We presented 3 clinical female cases and considered respectively. As the diagnosis case 1 and 2 were adolescent crisis, and case 3 was borderline state in the schizophrenic range. The conditions of these female adolescents were different one another at first sight. But observed closely, it was found that there was something in common among them as follows.

- 1) There was a problem of the division between purely experiencing self as "Noesis" and concretely functioning self as "Noema" which was unsuitable for it.
- 2) That appeared as the difficulty of self acceptance of "body" provided sexually.
- 3) Thus, a readiness of becoming "woman" was lacked in any cases.

Their background disturbing it was able to be found retrospectively in their life history and family constellation. Any case could gain neither good female model nor chum.

Case 1 was attacked in the age of junior high school, case 2 and 3 were in the beginning and the end of the age of senior high school. Case 1 behaved mainly in dereliction to the outside in form of "acting out", case 2 and 3 were mainly in dereliction to the inside in form of "autism". Case 2 refused school in bed all day and case 3 shut herself up in a double cocoon of hospital and depersonalization state. Both cases were very regressive, as if they tried to experience a warmness of mother which they could not get in infancy.

We think this point is different from case of male adolescent. The male should form his shell as one self actualization and shut himself up resolutely, if in these situation. But the female cases, could start up from there soon after experiencing such warmness. Accordingly, they had acquired for themselves a female role over again in the treatment situation. They became well in taking attitude of "Animus" through a handiwork i.e. embroidery.

However, it seems more difficult that the male adolescent must gain male role in this period. Because it seems probable that for the male this task will become the problem of ontological core of identity over only role level.